特集

忘れ得ぬ人々

私の出会ったクリスチャン

unforgetable people

神は私たちの人生に、みことばだけでなく、みことばに生きる人、みことばに生かされている人を送ってくださる。彼らは私たちのすぐそばで、静かに、キリスト者の真実を表しながら生きている。その喜びや自由にあふれる不思議な生き方、また、彼らのたたかいや失敗、真剣な悔い改めをとおして、私たちは福音のいのちそのものに触れさせてもらった。彼らの魂のなかに燃えていたものを、私たちは生涯、忘れることはないだろう。

レイアウト／Logos Design

牧師を育てた教会の母

佐藤 彰
福島第一聖書バプテスト教会 牧師

1986年頃の半谷昌さん。戦前、横浜のフェリス女学院で学び、1938年に福島の名家に嫁いだ後、キリストに出会う。

出会い

「助けてください」

あれは神学校一年生の時でした。突然であったように記憶していますが、白髪のきれいな姉妹が私を訪ねて、寮に見えられたのです。

適度に緊張し、急きょ、羊羹（ようかん）を買いに行き、お茶を用意したのを覚えています。お互いに初対面のせいもあり、どこかぎこちない光景でした。殺風景な寮の食堂で、彼女はひと言ひと言、ことばを選びながら、「東北の田舎の小さな教会ですが、牧師先生がいないんです。どうか助けてください」、そう懇願して、福島に帰られたのです。

それが二十一年前の彼女との最初の出会いです。その後、私は、「神の導きと受け止めて、行きます」と返事をしたためました。その手紙が届いた時、教会堂で草むしりをしていた彼女は、手を休め、手紙を手にして喜ばれたとお聞きしたのは、ずっと後のことです。

母親のように

今にして思えば、当時の私はずいぶん肩に力が入っていたと思います。二十五歳になってすぐ、神学校を卒業し、卒業式の十日後に結婚、そして赴任でした。

いわば右も左も分からない私を、母親のように、またある時は伴走者のようになって支え、受け止めてくれたと思います。

赴任当初、私がよく見舞われた激しい偏頭痛や胃痛、ヘルニヤなどの折、決まって彼女は、我が身か自分の息子に起こった一大事のように心

配してくれました。たとえば、他の教会員に私の健康状態を緊急連絡し、祈りを要請しては、見舞いに駆けつけ、当人の私が「一体何が起こったのですか」と戸惑うといった具合です。

また日曜日には朝から晩まで、気がつけば私のそばに待機していて、「神さまのご用のために、何でもやります。やることがあれば言ってください」との姿勢です。平日、集会に出かける時も、傍らにはいつも、彼女の姿がありました。

私の失敗

にもかかわらず、着任して間もなく、私は痛い経験をしました。痛いと言うのは、彼女が痛んで、その痛みがそのまま私の心に響いてきたという意味です。

何の理由だったかは思い出せないのですが、私は何かのことで彼女を叱ったのでした。おそらくは、私の「間違いは正すのがよい」との、杓子定規で相手を考えない発想から来ていたと思います。とにかく私は彼女を叱りました。すると彼女の目に大粒の涙が浮かんだのです。それは本当に悲しそうな、「申し訳ありません。消え入りたい」と言わんばかりの、心がしぼんでいく涙のように見えました。

私は予想外の彼女の「過剰反応」に直面して、おろおろしたのを覚えています。おそらくはあの時、人と接するときの間合いや、年齢の違う人に対する時の気遣い、また何よりも、杓子定規に行動せずに相手を知り、場面場面に合わせた万別の対応をすることなどを学んだように思うのです。

聖書の眼で観るならば「年寄りを叱ってはいけません。……年とった婦人たちには母親に対するように……やもめの中でほんとうのやもめを敬いなさい」（Ⅰテモテ五・一―三）との、ベテラン牧者パウロ先生から年若き後輩牧師テモテへのアドバイスとなるでしょうか。「あなたは正しすぎてはならない。知恵がありすぎてはならない。なぜあなたは自分を滅ぼそうとするのか」（伝道者の書七・一六）という警告もあります。いずれにしても、主は彼女を通して、天から貴重なアドバイスを私に下さいました。もしかしたらそれは、将来私が別の場面で取り返しのつかない失態を繰り返すことがないようにと、彼女が盾となってくれた、と言えるような気もするのです。

先生、その、お、おヒゲを剃ってください。先生には似合いません。

痛い忠言

彼女が意を決して私に忠告してくださったことがありました。

一時間前に電話があり、今から行ってお話ししたいことがあると、その声は心なしか震えていました。電車に乗って約三十分をかけてやって来た彼女は、牧師室に入るなり、涙声で「先生、その、お、おヒゲを剃ってください。先生には似合いません」とおっしゃるのです。

何をわざわざ来てお話があるのかと思ったら、「ヒゲをお剃りください」でした。当時の私は、二十代や三十代の牧師では若すぎる、そもそも牧師に見えないではないか、と深く考えもせず、いい気になって（似合うつもりで？）ヒゲを伸ばし始めていました。その矢先、彼女の涙まじりの懇願だったのです。

当時の私は、なぜ聖書に書いていないヒゲのことまで忠告されなければいけないのかとも思いましたが、彼女の一大決心と勇気をその涙に見ては、断念するよりほかにありませんでした。そして、それでよかったと思えるのです。

今となっては笑い話ですが、若気の至りから来るさまざまな暴走の芽を、彼女は知ってか知らずか、自らの役回りと自覚して、私に疎まれるかもしれないのに、心痛めつつ、私のことを案ずる心で、忠告すべきことを忠告してくださったのだと思うのです。

（もちろんヒゲが悪いということではありません。教会や地域性を鑑みた場合、当時の私にとっては、良くなかったということです）

「ああ、この人は倒れる瞬間まで奉仕するつもりなのだ」

半谷さんが寝たきりの状態で、1994年1月2日（日）に最後の礼拝に集われた直後、車椅子に座ったまま、佐藤牧師夫妻と取った最後の写真。この1ヵ月半後、2月20日午前3時、天に召された。

恵みに感動しつづけて

ある意味で、彼女は過去の恵みのリピーターでした。

よく著名な伝道者の先生は、メッセージの中で何度も何百回も、自分が救いにあずかった時のことを話されますが、彼女も同じでした。

自分が昔、東北の田舎町に嫁いで来て、米日間もない宣教師と列車の中で出合ったこと。それがきっかけで清水の舞台から飛び降りる覚悟で入信したこと。その後、由緒ある家柄の檀家総代の長男の嫁ゆえ、さまざまな信仰上の戦いを強いられたこと等々。けれども、彼女の証しの最後はいつも決まって、御国を仰ぐ希望でした。難しいと思われたご主人もやがて入信され、その後は、「自分は今、癌を抱えていますが、主人と天の御国でもう一度会えます」と繰り返しておられました。

過去に尊い救いの恵みにあずかったことを、毎回自らの心に刻むかのように話される、そのことばに違わず、彼女の生活はいつも輝いていました。とりわけ癌になってからは、いっそう燃え輝いているように見えました。七十歳を過ぎて乳癌の大手術の後、今度は、まだ動く指をもって主に仕えようと、当時高額のワープロを購入し、教会での奉仕を始めたのです。

「病になったから休みます」ではなくて、七十歳を過ぎてからの手習いです。微熱があってもエレクトーンの練習と、礼拝の奏楽もやめませんでした。

そんな姿があまりに痛々しく、ある時、役員会でこんな助言をしたのです。「姉妹、あなたは病身です。奉仕をせずに療養してください」。すると彼女は、またあのいかにも悲しそうな大粒の涙を流し、「皆さん

は私から奉仕を取り上げるのですか、だったら私は存在している意味がない」とまで言い切ったのです。

まるでパウロが「『あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています。』と答えた。彼が聞き入れようとしないので、私たちは『主のみこころのままに。』と言って、黙ってしまった」と記されている、聖書のひとこま（使徒二一・一三―一四）のようでした。

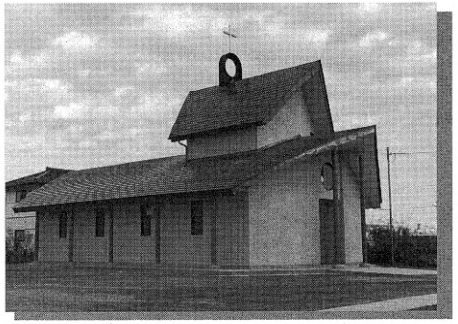
私も、「ああ、この人は倒れる瞬間まで奉仕するつもりなのだ」と悟ったのです。

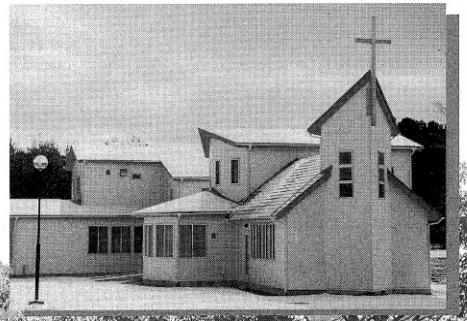
最期のわかれ

あれは亡くなる半年ほど前でした。彼女は私やほかの教会員たちと共に、自分を救いに導いてくれた宣教師（すでに引退帰国していた）に再会するため、アメリカの田舎町の教会を訪問しました。そこで彼女はこう語ったのです。

「皆さん、この先生を日本に遣わしてくださって、本当にありがとうございます。私は、さまざま辛いこともありましたが、今は福音の力をしみじみと実感しています。私の体内には四つの癌があります。けれど、死ぬことが全く怖くありません。それは、先生が私にキリストの福音を伝えてくださったからです。皆さんも、もしイエスさまの本当の力を知りたいとお思いなら、癌になってみてください」

どっと笑いが起こりましたが、退職した老宣教師の目は真っ赤でした。その涙は私には、「このたった一人の日本人に会うために、はるばる日本に行ってよかった。わが生涯に悔いはない」との涙に映りました。





【写真上】半谷さんが最初のガンになった時、手術直前にささげた土地300坪に、晩年（1989年）建てられた小高チャペル。

【写真下】半谷さんが94年1月2日（日）、召天直前にささげた1200坪の土地に建てられた夜の森チャペル（1999年）。

日本に戻ると、ほどなく彼女の体調は崩れ、寝たきりとなりました。一月二日の礼拝に、横になったまま車に乗せられて出席した後、自宅で寝たままの生活に入りました。幾度となく私たち教会員も訪問しましたが、行くたびに彼女の病床に、不思議な主の臨在を感じました。

たとえば、三、四歳の子でも、彼女が横たわる部屋に足を踏み入れたとたんに、涙を流してたたずんだり（おそらくは聖なる臨在に打たれたのでしょう）、クリスチャンではない方の口からも、「本当の神さまがいるとすれば、あの方が信じている神さまかもしれない」と聞こえてきたり……。

そして天の御国に召される直前。それは一九九四年二月十九日、土曜日の夜でした。日中に副牧師と教会員が訪問し、私がお訪ねしたのは、召される五時間半前でした。一見、もう瞳孔が開いていて、すでに意識がないかに見えました。これが最期かと、私は横たわる彼女の傍らに立ち、大声で賛美歌を歌い、説教をし、祈りをささげて後、こう語りかけました。

いつか「主よ、私が彼女の教会の牧師でした」と言える者になりたい。

「姉妹、本当によくがんばりましたね。あなたはこれから天の御国ですよ。私も後から行きます。私はあなたの牧師であったことを誇りに思っています」

するとどうでしょう。彼女の右側の頬がピクリと動いたかと思ったとたん、目にうっすらと涙が浮かんだのです。

その時の光景を、私は今も忘れることができません。それから五時間半の後、それは日曜日の早朝でしたが、彼女は地上の生涯を全うし、天に凱旋されました。

私は今、いつか彼女の脇に立った時、主の御前で「主よ、私が彼女の教会の牧師でした」と言える者になりたいとの一心で、牧師を続けています。

地上には、彼女が最初の癌になった直後にささげられた土地三百坪と、最期に遺言でささげられた土地千二百坪が残され、それぞれの土地に、チャペルが建っています。

私はこの二つの、目に見えるチャペルの前に立つ時、目には見えない彼女の信仰と、その後ろ姿を観る思いがして、しばし、たたずむことがあります。

三浦綾子文学
ゆかりの地を訪ねて
三浦光世氏を囲んで

2001年6月28日(木)～30日(土)

2泊3日 79,000円

旭川空港―塩狩峠―塩狩記念館―三浦光世氏講演―旭川泊
十勝岳展望台―富良野―美瑛―三浦綾子記念文学館―旭川泊
旭川―札幌―道庁―大通り公園―羊が丘展望台―新千歳空港

アーサー・ホーランド先生と行く
聖地イスラエル感動の旅
2001年10月15日(月)▶22日(月)
ネゲブ砂漠で4WD体験！ 8日間
旅行代金 298,000円
ツアーガイド：神原茂師
日程と料金が変更になりました。ご了承下さい。

秋のツアー
ドイツ・オランダ
キリスト教美術の旅
―宗教改革と美術―
10日間
2001年10月25日(水)▶11月3日(金)
旅行代金 328,000円
リーダー：町田俊之先生（バイブル・アンド・アートミニストリーズ代表）
サブリーダー：西村正幸先生（名古屋芸術大学助教授）

問合わせ・申し込みは…
いのちのことば社 宣教文化事業部
〒160-0016 東京都新宿区信濃町6
tel.03-3353-7449 fax.03-5368-6594
e-mail:sbj@wipm.or.jp
プランナー：松崎洋子